

学校の教育的機能の拡大過程 ～戦後の学校行事の変遷に注目して～

山田真紀（東京大学大学院）

1. 本研究の課題

日本の学校では運動会や学芸会、遠足、修学旅行、卒業式など、年間を通してさまざまな学校行事が催されている。これらの学校行事はわが国の教育制度が一応の完成をみた明治20年代には、ほぼ全国的に行われるようになっていた。先行研究によれば、大正期における新教育運動のなかで学芸的行事に新たな教育的意義づけがなされたり、昭和初期から終戦にかけては国家主義的・軍国主義的色彩が濃くなるなど、時代の世相を反映してその性格に多少の変化があったものの、学校行事は一貫して天皇制イデオロギーとの関連を密接にもった教育活動であったという。そうであるなら、終戦直後の学校教育制度の大転換のなかで、学校行事はどのように継承され、現在にまで存続してきたのだろうか。そこで本研究では(1)終戦直後から1958年に教育課程化されるまでの10年余の間に学校行事はどのような位置づけでどのように実施されてきたのか、(2)どのような経緯で教育課程化されたのか、(3)教育課程化された後にどのような内容と性格の変遷を遂げてきたのか、という3点に焦点を絞って、戦後の学校行事の変遷を跡付けることを課題とする。山田・藤田が述べているように、「広義の学校行事」は社会が学校教育に期待する教育的機能を反映する鏡として扱うことができる。つまり、広義の学校行事にどのような活動が含まれているかを調べることで、社会が学校に期待する教育的機能の種類と範囲を知ることができるのである。このような観点から戦後の学校行事の変遷を追うことによって、学校の教育的機能の拡大過程を明らかにし、現在進められている学校機能の再検討に資する資料を提示してゆきたいと考えている。

2. 終戦直後の学校行事の実施状況について

まず、学校行事のなかでも最も天皇制イデオロギーと密接な関連をもち、皇国民錬成のために利用されてきた儀式的行事に注目して、終戦直後の継承のされかたについて考察する。学校儀式は明治24年6月の「小学校祝日大祭日儀式規程」、そしてそれに続く明治33年8月の「小学校令施行規則」において、天皇への万歳奉祝や教育勅語の奉読を行うといった儀式挙行の雛型が規定された。さらに、昭和10年代に入り国民精神総動員運動が始まると、国家主義的・軍国主義的な学校教育制度への転換のなかで、それまで以上に儀式と行事が重要視されるようになった。昭和16年3月の「国民学校令」では「皇国ノ道ニ則リテ初等普通教育ヲ施シ国民ノ基礎的錬成ヲ為ス」ために儀式や行事を重視することが明記されている。このように国家主義・軍国主義的色彩を強めていた学校儀式は、終戦直後の学校教育制度の大転換において、どのような断

絶と継承を経験したのだろうか。

終戦直後の教育に関する政令・通達を集めた「終戦教育事務処理提要」によるとその辺りの事情を知ることができる。昭和21年7月に三重県知事からの「四大節に於ける学校挙式は今度いかにすべきか」という問い合わせに対して、学校教育局長は「目下研究中であるが差当り挙式の内容順序については学校長の識見に於て措置することが妥当である」と返答している(三学三二号)。ここから、挙式の内容順序は学校長の識見に任せられたが「四大節に於ける学校挙式」自体は継承されていたことが分かる。その後、昭和22年6月には「学校における宮城遙拝等について(発学二三九号)」にて「宮城遙拝、天皇陛下万才は今後やめること、する」とし、儀式において天皇崇拝を児童・生徒に強要してはいけないうこととなった。そして、昭和23年に四大節に代わって「国民の祝日」が制定されると、国民の祝日に「それぞれの分野において特に関係の深い過去の人々」、特に「民主的、平和的文化国家建設にふさわしい人」を選んで「頌徳祭、感謝祭、講演会等の行事を行いその人をうやまいその業績をたたえる」よう要請している(官秘七八号)。

つまり、行事の内容は国家主義的なものから民主的なものへと転換したが、祝日に儀式を行うという「枠組」自体は存続していたことが分かるのである。

さて、儀式的行事以外の学校行事は、「品川区教育のあゆみ」によると、GHQからの実施の奨励を受けて、小学校では22年頃から、新制中学校でも23、4年頃から遠足や修学旅行などが再開されていた。このように学校行事は教育的意義の変遷を経つつも、戦前の枠組をほぼそのまま継承し、実施されていたのである。

3. 学校行事の教育課程化までの流れ

このように学校行事は戦前の枠組をほぼそのまま継承し、各学校の伝統に基づいて実施されていたが、教育課程のなかでは何の規定も受けていなかった。これらの活動がどのように教育課程化されるに至ったのか。その軌跡を学習指導要領の改訂を手掛かりに3つの時期に区分して跡付けてみたい。

(1) 昭和22年「自由研究の時代」

(自由研究の時間の代用活動として)

終戦直後に出された学習指導要領の試案では、新教育運動の流れを受けて、新たに「自由研究」の時間が創設された。ここでは「個人の興味と能力に応じた教科の発展としての自由な学習」「クラブ組織による活動」「当番の仕事や、学級要員としての仕事」が行われることになっていた。しかし具体的にどのような活動や学習を行ったらいのかが曖昧であったため、現

場の教師達は自由時間のために充てられた週2時間をもてあましたといわれている。国立教育研究所の調査によるとこの時間を学校行事によって埋めていたという実態が明らかにされている。つまり「伝統的に行事の種類は大体定まっているし、その運営も年々行われる。従ってそれに児童生徒を参加させることは、一応手取り早いことで、児童生徒の生活を自ら運営するという態度の涵養にもなる」と考えられていたのである。

(2) 昭和26年「教科以外の活動」の時代

(集会活動の一部として)

4年後に改訂された学習指導要領試案では「自由研究」の時間は廃止され、その代わり「教科以外の活動(小学校)」「特別教育活動(中学校)」が新設された。ここでは「民主的組織のもとに、学校全体の児童が学校の経営や活動に協力参加する活動」や「学級を単位としての活動」を行うことになっていた。そして前者の活動に、儀式や運動会、学芸会といった学校行事に相当するものが含まれるようになったのである。

(3) 昭和33年「学校行事等」の時代

(学校行事が教育課程化される)

昭和33年に改訂された学習指導要領では、学校行事は「教科」「道徳」「特別教育活動」と並んで教育課程を構成するひとつの領域として位置付けられた。しかしここで「特別教育活動」と「学校行事等」を並立したことから前者は児童生徒が中心となる活動であり、後者は学校が計画実施する管理的活動であるという差異化がなされた。学校行事が教育課程化された背景には、無限定に拡大してしまった学校行事を整理し、真に教育的な活動だけを計画的に行おうとする意図があったのだが、このような事情から、学校行事の教育課程化は道徳の新設とともに、学校を管理的なものにする政策の一貫として解釈され、批判されるようになったのである。その後、昭和43年以降の学習指導要領では、学校行事は「特別活動」を構成する下位領域のひとつとして位置づけられるようになった。

4. 学校行事の拡大と精選

1958年に学校行事が教育課程化されたのち、3回の改訂を経て現在に至っている。その間、従来の枠組に「安全的行事」や「勤労・生産的行事」などが加えられ、社会の動向とともに学校行事の内容も変遷・拡大してきた。先に発表された「教育課程の基準の改善の基本方向について(中間まとめ)」でも学校行事に関して「自然体験、異年齢集団の活動や高齢者との触れ合い、ボランティア活動等体験的な活動を重視する」と述べられており、自然体験や異年齢集団との交流、福祉社会へ向けてのボランティア精神の涵養などが社会的に要請されている状況下で、学校行事の内容も変化しつつあることが分かる。このような社会的な要請下のもとで拡大を続ける一方、学校行事の歴史は「精選」の歴史であったといっても過言ではない。昭和35年の「中学校学校行事等指導書」の総論でも「これらの教育活動が全体の教育活動のうちで果たしてい

るその意義と役割を認めて、これを計画化し、組織化する根拠を明確にすると同時に、教育的な価値の必ずしも高くないものを排除して、教育の効率化を図るために学校行事の「精選整理」を行うことを強く要請している。また、現行の学習指導要領でも「学校行事については、学校や地域及び児童の実態に応じて、各種類ごとに、行事及びその内容を精選して実施すること」と明記されている。特に近年、学校週五日制完全実施を目前として「学校のスリム化」のかけ声のもとで学校行事の精選・厳選が進められていることは周知の通りである。このような学校行事の拡大と精選は、変化する社会のなかで学校教育がいかなる教育的機能を果たしてゆくべきなのかという議論を反映している。発表当日は、学習指導要領改訂のそれぞれの時期に、どのような学校行事が新たに取り入れられ、どのような活動が精選の対象になってきたのかを通して、学校教育の教育的機能の種類と範囲の変遷を跡づける作業を行いたいと考えている。

5. おわりに

現在、社会変化や教育改革の流れのなかで、学校教育が担うべき役割についての再検討が急速に進められている。本研究は学校行事の拡大と精選のプロセスを通して、学校の教育的機能が社会のどのような要請を受けて変遷してきたのかを明らかにすることで、日本の学校教育の教育的機能の種類と範囲を相対化し、学校機能の再検討を行ってゆくうえでの資料を提供できるのではないかと考えている。また、現在、学校週五日制の影響のもとで、学校行事が安易に縮小・削減されるという事態が起きている。日本の学校において学校行事を通してさまざまな教育的役割が遂行され、それらの活動が教師や生徒の学校生活に大きな影響を与えているのなら、さらに、削減された教育的役割を代替する機関がいまのところほとんど存在しないのなら、これまで学校行事が担ってきた社会的機能について早急に検討することが求められるだろう。本研究がその作業の一端を担えるなら幸いである。

(参考文献・資料)

- 河野重男「学校行事」『日本近代教育史辞典』平凡社 昭和46年pp.226-228
 国立教育研究所「全国小学校教育過程調査Ⅲ」『所報』第六号昭和26年7月pp.25-34
 東京都品川区教育委員会「品川区教育のあゆみ」昭和47年3月pp.72-84
 山田真紀・藤田英典「学校行事における活動の編成形態」『東京大学大学院教育学研究科紀要』第36巻1996年 pp.161-174
 山本伸良・今野敏彦『近代教育の天皇制イデオロギー』新泉社1987年
 宮坂哲文『小学校特別教育活動の新教育課程』国土社1958年